
夕暮れは蒼く染まる ～双刀の物語～

石川 剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕暮れは蒼く染まる ～双刀の物語～

【Nコード】

N4055E

【作者名】

石川 剣

【あらすじ】

幼い頃に両親を亡くした石川・剣は、この度の高校入学を機に一人暮らしをはじめた事となった。なんの変哲もない生活が続く、やがて五月を迎えた。そんなある日、石川は海辺で蒼い光を目撃することとなる。常人に見えざる光を目撃したそのときから、石川の生活は一変した。

第一話 【蒼い夕暮れ その1】

五月の初め、満開に咲き乱れる桃色の花弁を揺らしながら惜別と出合いの場を見守っていた桜も散り、人々は何かと始まる新しい生活にも慣れ始めていた頃。散った桜はつややかな新緑色の葉を生やし、しかし人々はまた来年も桃色の花弁が見たいねと顔に笑顔を咲かせている。

その心に、桜が残っているからだろう。毎年同じように咲いているにもかかわらず、人々の心には桜が鮮明に残っている。

五月。その季節は皮肉にも、新鮮な生活に慣れてしまったが故の精神的病、五月病が囁かれる季節だ。五月も一年周期で訪れているにも関わらず、同じ周期で訪れているはずの桜とは随分と扱いが違うものだ。

なら、人はどうだろう？

誰かの心に残るのは、一体どういった者なのだろうか

梅雨入りを目前に控えた空が一足早い大雨に蔽われたのも昨日の話。その名残か、今ではしとしとと小雨が降り続けている。

そんな小雨の雫を受けるのは生気溢れる緑色が栄える桜並木だ。上り坂を挟んだその並木を辿れば校門へと行き着き、校門には『誠心商業高等学校』と掘り込まれてある。そこを通る下校生は傘を差す者も居れば、小雨は雨のうちに入らないと豪語しそのまま歩く者も居た。だが校門を抜けた左側にあるグラウンドでは、丸坊主の少年達が最初から雨など気にしていないかのように泥まみれの白球を投げ合っている。本来ならば白いはずのユニフォームも、白球に負けず劣らず泥だらけだ。

そんな熱気に溢れたグラウンドを左に、並木を前へ行けば二つ目の

上り坂がある。その上り坂を登れば最初に見えるのは一年棟だ。一年棟の東隣には教員棟があり、北側には体育館を挟み二・三年棟が在る。二・三年棟から渡り廊下を抜ければ、教室ではできない授業を行う専門棟、文系の部室などが存在する部活棟が存在する。上空から見上げれば、グラウンドの隣にI字型の校舎があり、体育館を挟み、H字型の校舎が見て取れるだろう。

学校自体が山中中腹にある誠心商業高等学校は、その周辺を木々に囲まれている。故に校舎周辺は静寂に満ち、賑わう声を見せているのは校門の内のみだ。今では放課後独特の賑わいが校舎を包んでいた。

そんな青春の香りがする中、生徒の居ない一年棟の教室に影がある。曇り空で陽光も求められない中、電気も点けずに窓際に立つ少年の影だ。

電気も点いていないというのに、彼は机の上に腰掛け文庫本を片手に持っていた。栞の挟まれた文庫本はそのままブレザーの左ポケットに入れられる。左胸には青いプレートに白字で『石川』と掘り込まれていた。

線の細い黒髪は湿度に負けずサラサラと揺れ、その髪の下には鋭い目に高い鼻、引き締まった唇がある。一見して表情に乏しいその両眼はグラウンドへと落ちていた。

視線の先にあるのは高校球児達が怒声とも奇声とも取れる大声で、飛んでくる球に飛びついている光景だ。

耳には怒声を掻き消すように吹奏楽部の演習の音が響いてくる。今は個別練習らしく、トランペットの音が同じ場所を繰り返して奏でていた。しかし詰まる場所もまた同じで、姿は見えないが必死な様が石川の脳裏を過ぎった。

「部活か……、誰も彼もが必死だな。雨の中よくやる」

どうしてそう必死になれるのか、と石川は続けて言った。

顔をグラウンドから教室内の時計に移す。時刻は午後五時過ぎを差し、普段ならとつくに帰宅をしている時間だ。

「そして先生もよくやるな……」

言い、腰を上げた石川は隣の教室へと移る為に扉に手をかけようとしたが、その手が届く前に扉は横へとスライドした。

「きゃっ！」

石川の姿が急に視界に飛び込んできたためだろう。扉を開けた主は小さく悲鳴を上げた。

ショートカットを思わせる黒髪に、飾りのような細い三つ編みが両肩まで伸びている。大きな瞳は一杯に開かれ、暗がりの中でも潤んで見えた。

「人の姿を見るなりいきなり悲鳴なんて、失礼だな朝倉さん」

「だ、だって石川君明かり点けてないんだもん」

普通誰も居ないと思うよ、と続けた朝倉は教室へ入り通学鞆を手に取る。グラウンドをちらりと見やり、うわーと小さく感嘆の声を漏らした。

「あ、それと次は石川君の順番だよ。笹井先生が妙にやる気だったから気をつけて」

振り返り、両手で鞆を抱えた朝倉は苦笑交じりに言った。そのまま教室内を見渡し、

「あれ？ 護条君は？」

「気付いたら居なかった。どうやらサボりだな」

「朝倉さんは何の部活に入ることにしたのかな？ 今のところ、形だけでも何かに入っていないければ笹井先生が泣き脅しに走りそうだ」

朝倉はもうされた、と呟き首を振る。

「そういう石川君だって決めてないでしょ？ 何でもそつなくこなしているように見えるのに、何かやりたいことないの？」

「やりたいことか……。今のところ特に集中的にやりたいことはな

いよ。そう苦労しなくても大抵のことは出来るしね」

「うわ、それ才能溢れる人の台詞だよ石川君。友達なくしちゃうよ？」

「器用貧乏なだけだ。なまじなんでも出来る分、ある一定の水準以上には進めなくなるのが私の悪いところだ」

それから必死になれないところも、と石川は付け加え教室の外へと出た。

「余り笹井先生を独りで待たせると、寂しさで孤独死してしまいそうだから、そろそろ行くよ」

背後から聞こえる、お手柔らかにという声に送り出される。

トランペットの音はムーン・ライト・セレナーデだということに今更ながらに気が付いた。

石川は教室の前に立っていた。右上のプレートを見れば『生徒相談室』と書かれている。さっきまで自分が居た教室からは明かりが漏れているので、彼女はまだ残っているつもりなのだろう。

ノックを三回し返ってくるのは、どうぞーという間延びした声だ。「失礼します」

一応断りを入れ扉をスライドさせる。教室の中央には対面している二つの机と椅子があり、その他はなにもない。基本的に教室の造りは他の場所と同じようだ。

……まるで取調室だな。
その机の一つには笹井が既に座っており、両肘を机につけ手を組んでいた。

表情は深刻そのものだ。ゆるくウェーブの掛かった長い栗色の髪は、教室が暗いために今では黒く見える。

「どうでもいいですが笹井先生。何故明かりを点けていない上に机の上にスタンドライトがあるのか訊ねてもいいでしょうか」

言いながら机まで歩く。笹井は問いに無言を返し、顎で座るようにと促した。

威圧的だ。

促されるままに椅子に座った石川を確認した笹井は、

「剣君。この学校の方針は知っていますね？」

静かに切り出した。

「誠の心を育てるために文武両道を重んじるこの誠心商業高等学校は、一年生の皆さんにはまず何かしらの部活に所属してもらうのが決まりです。そして、暦も五月に入った現在。未だに無所属な一年生は三人。朝倉・瑞樹さん、護条・茂貴君。そして、石川・剣君、あなたです」

「三人とも先生のクラスじゃないですか。苦労しますね」

「そう思うならどこでもいいので部活に入ってください！」

ばん、と机を叩く笹井はやや涙目であり切実だ。

こめかみを揉みながら溜息を吐き、おもむろに立ち上がった笹井はスタンドライトを石川に向けた。

「さあ！ どこか入りたい部活はないか吐けです！ ネタは上がっ

てるんですよ！！」

「眩しいですよ先生。……ってか、ネタってなんですか」

「ふふん。先生は知っていますよ。石川君は何にも興味がない振りをしてながら実は心霊現象というものに興味を持っているということ！ その証拠が、今君の左ポケットに入っている文庫本ですよ！」

「口調が怪しくなってきましたよ笹井先生。それにこれは引越しの際、義父さんが大量に送ってきた物の一つです。私の趣味じゃない」
スタンドライトを笹井の方へと捻り、石川は文庫本を机の上に取り出した。カバーのしていない文庫には『つくも神』と簡素なタイトルが書かれてある。

著者名はない。

そのタイトルを見た笹井は、はあーと意味のわからない感嘆の声

を漏らし、

「では、石川君のお父さんはそういうのが趣味な人なんですなー」
恐らく笹井と自分では『おとうさん』に対する字が違うのだろうが、石川は面倒なので放っておくことにした。

「趣味というより仕事にしていましたね。これも義父さんが書いた
ものですよ」

笹井は立った状態のままスタンドライトを机の上にある文庫へと
向ける。

そこには、食器や草履、はたまた朽ち木などが手足を生やし列を
成している様が映し出されていた。

周囲の暗さも相成ってなんとも言えない不気味さだ。

「お、お父さんは作家さんだったんですか？」

気圧された様子の笹井が言う。

「出版はしていませんがね。それも趣味で作ったものです。義父さ
んは、怪異や心霊現象が趣味というより、それを文章にすることを
生甲斐にしているような人ですよ。手段が目的になったように、私
には見えますがね……。最近では私にも同じ趣味を持ってほしいの
か、作品を読むようにと良く言われるんです」

「どこでもお父さんは息子さんとのコミュニケーションに苦勞
していますねー」

先生子供居ないからそういうの難しいです、と続けた笹井は、
「それで、剣君はお父さんの本を読んでどう思ったんですか？ 読
んでいるということは、ちょっと楽しいのかなー、と先生は思っ
ちやってるわけですけど」

考える。自分はこの本を楽しんでいるのかということ。考えて
みれば送られてくるのは大量の資料だ。

小説のように物語があるわけではなく、異界・心霊現象の伝承や
考察が延々と綴られている。そんなものを、石川はほぼ毎日読んで
いた。

それでも未読の資料は文字通り山のようにあるが。

……本当のところは、分からないな。

「他にすることがありませんから」

だから出てくるのは言い訳の言葉だ。楽しいとも楽しくないとも言えない、どっちつかずの答えしか石川には用意することが出来ない。

「部活ではダメなんですか？」

「楽しそうな部活がありませんから。それなら家に帰って本を読んでいる方がいい」

ふうん、と笹井は相槌を打つ。

「剣君は臆病なんですね」

「臆病？」

「臆病ですよ。結局現状が変化することを怖がって、無難な道を選んでるだけじゃないですかー。んー、選んでるっていう言い方にも語弊がありますよね。剣君は、選ばない人ですから」

笹井は腕を組み難しそうに首を傾げている。

「……そうかも、知れません」

「あいたたたー、重症ですね」

認めちゃうんですかー、と言いながら手のひらで額を叩き天井を仰ぐ笹井。

彼女の物言いに石川は思わず頭を掻き、

「どうにも、自分の悪いところは分かっているつもりです。でもやりたいことと言つのが見つけれない。本気になれないんですよ。本気になるということは、必死になるといことでしょうか？」

「はっはーん、剣君はその必死になるといことが格好悪いことだと、そう思っているわけですねー？」

「現代の若者らしく」

「そんな間違つた流行にのらないで下さい！」

深く溜息を吐いた笹井は、仕方ありませんねー、と言いながら石川の元まで回りこみ肩に手を乗せた。

深刻な表情で、

「カツ丼、食つかです」

とりあえず高速でデコピンを叩き込んでおいた。

「あいたあ!」

「いきなりですね。……っていうか、やっぱり取り調べネタだったんですか!」

「ネ、ネタとはなんですかネタとはあ! 先生はいつでも本気ですよ!?!」

「なお悪いわっ!!!」

二度目のデコピンを叩き込んだところで笹井は、ひえー、と情けない声を上げながらしゃがみ込んだ。

「これだけのことを電気点けずにスタンドライトのみでやってるんだから、馬鹿ですか貴女は」

「バカっていうなあ!」

立ち上がり、同時に流れるのは携帯の着信音だ。かあさんは夜なべをして、で有名なかあさんの歌。

「剣君……、田舎の両親が心配していますよ。一人でご飯は食べれているのか、学校は上手くやれているのか、そして、部活には入っているのか」

「両親は死んでいます」

「じ、地雷踏んじやいましたー!?!」

「ははは、メッキはがれてますよ似非刑事」

笑い、石川は席を立つ。

さつきから真つ暗な教室に明かりを点けるためだ。

「一通りやったんだから、取調べネタはもう終わりでしょう? ほん?」

朝倉は窓から外を見ている。

時刻は午後五時三十分。石川が教室を出てからもう三十分は経と

うとしていた。

グラウンドを照らす照明には灯りがともり、しかし球児たちは変わらず気迫溢れる練習を繰り返している。背後からはトランペットの音が聞こえた。壁越しに聞こえるその音は、しかし十分大きいものだ。恐らく廊下で練習をしているのだろう。

「凄いなー」

グラウンドを見ながら感嘆の声を漏らした朝倉は視線を少し遠くへ向ける。その瞳が移すのは、曇り空の下に広がる海。瀬戸内海だ。山の中腹から見下ろすその景色は、瀬戸内海に浮かぶ数々の小島まで見通すことが出来る絶景だ。この時間帯ではライトアップされた瀬戸大橋を見ることは出来ないが、代わりに暗闇を照らすのは港に広がる住宅地だ。人々の生活が灯すその光は、人工的な瀬戸大橋にはない美しさが見て取れた。

「長いなー。石川君」

何もすることがなく、ただ外を眺めることで時間を潰す。静かな時間は嫌いではないので待つことは苦ではない。ただ、少し不安がある。

「私が待つてること、石川君はどう思うだろう」

待ち人は、朝倉はとうに帰ったと思っただけだ。それでも待っている自分を見つけたとき、彼は一体どう言うだろう。

……迷惑、とは思われないよね。多分。

思い不安になる。さっきからその繰り返した。だからそれを紛らわせるために、窓から外を見ている。必死に動く彼らに意識を集中し、それ以外を考えないようにと勤める。

朝倉が野球の球の動きに集中し始めた頃、背後から聞こえるトランペットの音がクリアになった。

扉が開いたためだ。

「お、誰か思ったら嬢ちゃんやないか。こんな遅うまで何やっとな？」

急の聲に朝倉は驚き振り返る。

「護条君」

そこには派手な金髪に精悍な顔立ちの影が立っていた。

金髪は肩まで伸びており、左耳には赤いピアスが見える。一見して綺麗な顔立ちのその顔は、今では少し意地の悪そうな笑みを浮かべている。

「こないな時間にどないしたん？ 窓から外やこ眺めてからに、背後が絶賛青春中やで」

護条は自分のことは棚に上げ質問した。制服はブレザーを着ていない状態で、鞆も持っていない。

「えと、笹井先生と面談してて……。放課後ホームルームで言ってたよ。護条君も呼ばれてたけど」

朝倉は斜め下を見ながら言った。

「ああ、部活がどうのこうのってやつか！ 確か剣も呼ばれとったが」

「石川君は今面談中」

「ふうん、せやから隣も明かりが点いとるわけか」

頷き護条が次に浮かべるのは意地の悪い笑みだ。上目遣いに護条の顔を見上げる朝倉にはそれが見えた。

「で、出席番号順に言えばとうの昔に面談が終わつとるはずの嬢ちゃんは、何故まだここに残つとるんかな？」

問われ朝倉は大いに焦った。

「え、それは。その、えーと、……外に、雨が降ってるから」

だから良い機会なのだ。朝倉にとつて、今日という日は石川と一緒に帰る口実に困らない日である。だが、それを他の人に喋るのは気が引け、言えば自分の感情が外に漏れてしまうようで気恥ずかしかつた。だが他に良い言い訳が咄嗟に浮かぶわけもなく、しかも言いかけた言葉を途中で止めることもできない朝倉は下を見ながら臍の前で両手を組む。

「……………」

それでも沈黙で遣り過ごそうと抵抗を試みるが、じっと朝倉を見

ている様子の護条は見逃してくれそうにない。

言葉を待っている。

「石川君、傘持ってなかったから顔を上げ、」

「ほ、ほら。風邪引いちゃったら大変だよな？ 石川君一人暮らしだし、看病してくれる人居ないから。そ、それに自宅まで結構距離あるし、ほら、その……、ね？」

一度言葉が出れば後は次々と言い訳めいた言葉が出た。

「ほう、剣は一人暮らしやったんや？」

「へ？」

「それに嬢ちゃんは剣の家知つとるんやねー」

「あ……」

「確か高校に入ってから知り合いやる？ いやあ、それがまー」

「な、何が言いたい護条君」

自分より頭一つ分高い顔を見上げ、朝倉は体温が上昇していることを自覚する。

「随分と仲がよろしいことだと思っとな」

「よ、良くないよ！ ちょっとお話しするだけだもん」

思わず出るのは否定の言葉だ。

それを聞いた護条は相変わらず楽しそうに、

「いや、でも実際風邪引いたほうがええんとちゃう？ 看病しに行

ったほうがポイント高いで」

「それはダメだよ！ 行く勇氣ないし」

と、そこまで言っただけで自分の言葉の意味に気付く。

「行く勇氣がないっっちゃうことは、少なくとも行きたいっっちゃうことやね。いやあ、嬢ちゃんは正直やなー」

「いやいや、剣も幸せもんやなと言いなながら護条は教室を出て行くとする。」

でもな、と背中越しに更に言い、

「あの理屈屋は難しいで？」

「べ、別に私はそんなのじゃ……」

朝倉の言葉が言い終わらないうちに護条は教室を出て行った。後には顔を赤くさせた朝倉が一人ぼつんと残っている。

「護条君、結局何しに来たんだろう」

「あのー、ご両親のこと聞いてもいいですか？」

すっかり取り調べネタから抜けきった様子の笹井は上目遣いに切り出した。

明かりがついた教室内は外の雨音が遠慮気味に響き、外の暗さと相成って窓は鏡のように石川たちを映し出していた。

「何故？」

「んー、さつき剣君はお父さんから引越しの際にこの本を贈られたと言いましたよね？」

笹井は文庫本を指差し、

「だけど剣君はさつきご両親は亡くなられたと言いました。確

か、剣君がこの児島に引越してきたのは三月も終わりになっからでしたし。ええと、よくわかりません。……ごめんなさい」

「謝る必要はないですよ。誤解に気付いていたのに訂正しなかった私も悪いですから」

どこから話せばいいものかと一瞬思索し、考えをまとめた。

「私の産みの親は、私がまだ五歳の頃に死んだと聞いています」

「聞いています？」

「覚えていないんですよ。事故に遭ったらしいんですが、バスが横転して生き残ったのは私だけらしいです。私の記憶は、病室で親戚夫婦、つまり今の育ての親が心配そうに覗き込んできているところからしかありません」

笹井が何かを言おうとする前に石川は続けた。

「でも別にそれが不幸なこととは思ってません。不幸自慢をする

つもりもありませんしね。今の両親は子宝に恵まれなかったから、私のことを本当に大切に育ててくれましたし、私も本当の両親のように思っています」

だから、と石川は言った。

「他人の尺度で哀れんでほしくない。私は今、十分満足しているのですから」

そうは言ったものの、笹井は下を向いて言葉を捜していた。眉尻が下がり悲しそうだ。

……だから誤解があることを解つても注意しなかったんだ。

石川は思う。

この手の話はするだけで相手を困らせる、と。既に過去の話で自分は何とも思っていないなくても、氣遣わせてしまう。

そこに一つの音、ノイズが紛れ込んだ。

教室の左上に設置されている放送用のスピーカー。放送の前兆であるホワイトノイズだ。

石川と笹井は顔を上げる。

『 下校時刻になりました。部活動などでまだ校庭や校舎内に残っている人はすぐに帰宅してください』

それだけ告げるとぶつつ、という音をもって放送が終了した。

「時間なのでそろそろ帰ってもいいですか？」

言いながら石川は笹井の了承が出る前に立ち上がった。

「あ、はい」

焦り気味に答え慌しく立ち上がる笹井を背に、石川は教室を出ようとして、

「ちょっと待ってください」

という声に呼び止められた。

「？」

振り返れば何かを思い出したように目を大きくしている笹井の姿がある。

「そういえばまだ部活のお話が終わってないですよー」

「先生らしからぬしつかりさですね」

結局、石川が教室を後にしたのは時計の短針が六の数字を過ぎてからだ。

自分の教室には当然明かりが灯っている様子もない。部活動をしていた生徒も今は居ない。

廊下の明かりは点いているものの、今までであった喧騒がなくなつた校舎は、何とも言えない静けさに満ちていた。人が居ない学校とは、それだけで恐怖心を駆り立てる。

響くのは自分の足音だ。

左側の窓を見れば、今まで降っていた小雨は無視できる程度になつていた。傘を忘れた石川にしてみれば笹井との長話も意義があつたものに思えてくる。

「今週中に決めなさい、か」

石川は帰り際、笹井に言われた言葉を繰り返す。

……部活に入る気はないんだが。

下駄箱に付き、溜息混じりに上履きから下穿きに履き替える。

上履きを下駄箱に突っ込み、いざ雨の中へというところで石川は足を止めた。止めた理由は、

「……誰か居るのか？」

気配だ。

空気の停滞した黄昏時の校舎で、石川は何か動くのを感じた。曇りとは言え、まだ周囲を視認できるほどには明かりがある。晴れていたならば夕暮れ時だっただろう。

「……………」

しかし相手は動く気配をみせない。何処に居るのかはわからないが、

……誰か居るのは確かだ。

と思った石川は気付く。
影だ。

下駄箱の裏から、暗い地面を更に暗く照らす影が伸びている。相手はまだ石川が位置を確認したことに気付いていないはずだ。それを考えた石川の動きは早かった。音を立てないように反対側から下駄箱の裏に回りこみ、相手の後姿を確認。

暗がりでは詳細は確認できないが女子生徒だ。ただの女子生徒なら良かったのだが、その手には傘が力いっぱい握られていた。閉じられた傘は上を向き、その先端は軽く揺れている。持ち手が緊張している為だろう。

……どう見てもこれから殴りかかりますって感じだな。

心当たりを捜すが該当者は存在しない。そもそも入学してから一ヶ月も経たないうちに恨みを買えるほど嫌な性格はしていないつもりだ。だが現に、目の前に襲撃者は存在する。ならばすることは一つだ。危険は排除するに限る。

石川は胸ポケットからボールペンを取り出し、相手の頭を越すように投げた。山形の軌道を飛ぶボールペンは、そのまま地面に落ちる。落ちた位置は石川がそのまま進んでいれば一歩目を踏み出すであろう場所だ。

びくつと女子生徒の肩が震え、少女が一步を踏み出そうとしたところを石川は押さえた。

……もらった！

後ろから左腕一本で抱きとめるように動きを抑え、右手で傘を握り込む。

「きゃあっ!!」

女子生徒は悲鳴を上げ固まった。

「抵抗をしないのは良い事だが、何のつもりだ」

石川は握る両手を緩めずに問う。

「……………」

問いに帰ってくるのは沈黙だ。

後ろからなので顔の確認は出来ず、石川は左腕に少し力を込め引き寄せた。そして顔を覗き込めば、そこにあるのは大きな瞳が印象的な柔和な印象を覚える少女。

朝倉・瑞樹がそこに居た。

「……………」

空気が凍る。今までその場を支配していたのが静寂であるなら、今この場に満ちているのは沈黙だ。

石川は考えた。相手は朝倉だ。傘を上向きに構え震えていたのは何故か解らないが、少なくとも人を襲うような真似をする子ではない。それに相手が朝倉であるなら襲われる理由は尚更ないということになる。

しかし石川は自分の考えを却下した。決め付けてかかるのはよくない。自分の知らないところで恨みを買っていたのかもしれない。

……………ならば謝らなくてはいけないだろう。

決めた。例え襲い掛かってきたとしても相手が朝倉であるなら反撃には臨めない。そして興奮した相手はまずなだめに掛かるのが定石だろう。

「朝倉さん……………。何があつたのか知らないが、落ち着くんだ。私に出来ることがあるならなんでもしよう」

朝倉の肩がぴくつと動き、

「なんでも？　本当に？」

「ああ、私に出来ることであるなら」

反応が返ってきたことに安堵した石川は、警戒を解かないまま返事を返した。

「あの、なら、私と一緒に」

「あー！　つ、剣君が朝倉さんを襲っていますよー！！」

帰り支度をした笹井が指を指し立っていた。

「有り余る若さを押さえきれずにハッスルですかー！！　一人称私の癖にそんなむつつり属性を備えていたなんて先生吃驚ですよー！！」
現行犯です、と人差し指をぶんぶん上下に振り回し叫ぶ笹井は涙

目だ。

「お、落ち着いてください笹井先生。状況を良く見てください。私にやましい点は一つもない!」

弁明する石川は、顔だけを笹井に向け言う。

「先生逆に言っちゃいますよ? 石川君、自分の現状を描写してみてください」

「また急におかしなことを言いますね」

まあいいですが、と一言置き、

「左腕で朝倉さんを拘束し、右手は傘へ。朝倉さんの表情は心なしが赤く、少し震えていますね? 更に言うなら体は軟らかくて若干良い香りがごめんなさい許してください誤解なんです」
平謝りした。

当然両手は放し、更の上にあげ無抵抗を表す。

「先生犯罪者を生徒に持ったのは初めてですよー!!」

わたわたと両手を左右へ広げ上下へ動かす笹井。

「担任生活ニヶ月目のペーパーが知ったかぶるな!」

石川は思わず叫んだ。叫んだ後敬語を忘れていたことに気付き、

……冷静さに欠いているな私!

そんな笹井と石川の間に声が入る。小さく控えめな叫び、

「あ、あの!」

朝倉だ。

先ほどと変わらず傘を上にも構え震えている。違うところといえば表情が心なしが赤いところくらいか。石川の取った行動を気にしている余裕はないように見える。

「さつき、石川君言ったよね?」

ちなみに笹井は眼中にないようだ。

「何をかな?」

「何でもしてくれるって! だから、だから私と」

傘を突き出しながら朝倉が要望を告げる頃には、雨はすっかり止んでいた。

先ほどまで響いていた雨音もすっかり止み、校舎内には誰も残っていない。いや、もうしかしたら誰か居るのかもしれないが、少なくとも護条・茂貴の知る限りそこに人影を確認することは出来なかった。

金髪を靡かせたるそうに歩くその姿は、暗い校舎に妙に馴染んでいる。

「さながら、夜の学校に忍び込んだ不良ってとこやな」

自分の見た目をそのまま呟く護条は、もはや電気さえついていない廊下を歩く。

今歩いているのは部活棟だ。部活棟三階、その東端にある教室を指している。何故こんな時間に部活棟に居るのかといえば、理由は簡単。

部活動をするためだ。

……まったく、時間も日程も不定期うちゅうのはやっかいやな。

東端に位置する教室のプレートには何も書かれていない。真っ白だ。しかもその教室は、本来ならば存在しないことになっている。

誰も辿り着くことが出来ないからだ。廊下の両端には縦十センチ横五センチほどの紙片が貼られており、そこには黒字で『不可視・不可侵』と書かれてある。

結界だ。

つまり、部活棟の東端にたどり着いたものは、無意識のうちに引き返してしまう。真に高度な結界は、そこに結界があることすら悟らせない。それが此処には貼られていた。そしてその結果を張っている主こそが、今から護条が行こうとしている部活の顧問だ。

「といっても、部員二名なうえに非公認やけどな」

苦笑し、護条は名のない活動の扉を開ける。

中は普通の教室の半分ほどの広さで、教室の中央に長机が置いて

ある。そして一番奥には部長用の机があり、そこには既に一人の少女が腰掛けていた。

「遅いですよ茂貴」

微笑を浮かべ制服に身を包む少女は、腰まである長い黒髪を払いながら言った。

「そないなこと言っても、連絡事体が遅かったんやから仕方ないやろう。しかも何でこないな時間帯やねん。別に普通の時間帯でもええやろう」

続けざまに文句を言い、護条は手近な場所に腰掛ける。

「あら、夜の方が雰囲気ができるじゃありませんか」

「心の底からどうでもええな」

少女の言葉を手をひらひら振ることで流した護条は椅子に深く腰掛け、

「で、今回は何で呼び出したんや？ この前の地縛霊は無事浄霊したし、西園寺も最近じゃ大人しいやろ」

少女は今回はその件ではありません、と前置きし、

「瀬戸内海沿岸で妙な力を感じるという報告がありました」

凜とした声が響く。

「場所は唐琴から渋川までの道程です。明確な場所は確定できませんが、その間であることに間違いはありません」

「報告ねえ、相変わらず瀬戸家の情報はお早いことで、力の程は？」

「今のところ微弱です。ただ、不審ではありますね……」

少し考えるような仕草を見せた少女は続ける。

「今まであそこに何か居たという形跡はありませんでした。ですから、霊的な存在が居るはずはないのです。新たに現れたとしても、そのきつかけとなる物がない」

「浮遊霊とちゃうんか？ あれなら移動もするやろ」

「微弱ですが力があるんです。浮遊霊であっても移動の痕跡が見られません。あれはあそこに発生したものと考えるのが妥当です」

ですから、と少女は続ける。

「その力の根源を調べてきてください」

「りょーかい、姫さんの仰せのままにってな。それにしても人使いの荒いこっちゃ」

「あら、心外ですね。私は茂貴を使っているではありません、お願いしているのです。嫌なときはいつでも断つてくれて結構ですよ」

微笑し、姫さんと呼ばれた少女は立ち上がる。

「もし断ったら？」

「困ります」

即答した。そのまま部室内に置いてあるポットまで行き珈琲を淹れ始め、

「どうしましょう？」

と問うてきた。

「あ……、悪い。聞いたワイがアホやった」

頭を掻く茂貴を見やり、少女は微笑を深める。

「ふふ、私たちは別に利害関係で結ばれているわけではない。そうでしょう？」

答える代わりに茂貴は肩をすくめ、

「お互いに困ったときは助け合う。最初に交わした約束やったからな」

「ええ、最初に手を差し伸べたのは驚くほど慈悲深い私でしたけどね」

言いながら護条の前に琥珀色の液体で満たされた紙コップが置かれた。一言礼を述べ護条はコップを傾け、

「……甘っ」

渋面した。

「あら、茂貴は砂糖九つじやありませんでしたっけ？」

頬に手を当て首を傾げる少女は、優雅に珈琲カップを傾ける。

「姫さんはワイに糖尿病になれっていうんか！？ っていうかなんやその豪快な勘違いっぷりは！」

あらあら、と目を丸くした少女は言う。
「それはまあ、困りましたね？」

石川・剣は困っていた。

下駄箱で朝倉の誤解を解き、彼女の言うとおり一緒に下校するという変わった願いを聞いた石川は現在下校中だ。傘を突き出し、風邪を引いたらいけないからと懸念してくれたのはありがたいが、外に出てみれば今にも止みそうだった雨は既に降っていたなかつた。

だから現在、傘を差す必要もないが朝倉の願いは有効であると判断した石川は帰路を共にしている。

……そもそも、断る理由もないしな。

左隣を見るが、その朝倉はさつきから一言も発していない。心なしか不機嫌に見えるのは気のせいだろうか。学校から現在地である海岸沿いに至るまで朝倉は地面を見ながら歩き続け、眉根を寄せている。

……難しい顔をしているな。

結果として、石川と朝倉との間に会話は成立しないのだが、場が沈黙に包まれているのかといえはそうではない。

「ですから、先生は学校の購買にコンビニのお弁当を置くべきだと思いますよ！」

「いきなりなんですか」

笹井が同行しているからだ。朝倉の要望を聞き入れたまではないが、笹井がその場に居合わせたため一緒に帰ると言い出したのだ。

……その年で免許を持っていないのもどうかと思うが。

「ええとですね、先生朝弱いんですよ」

「だから購買に出来合いのものがあれば問題ない？ 学食があるでしょう学食が」

「学食は高いんですよー！ 何でラーメンやうどんに五百円もかけ

ないといけないんですかー」

「普通それは学生の言い分ですよ……」

溜息を吐き、洪川へ続く沿岸沿いを歩く。空は相変わらずの曇り模様だが、一部雲が薄い部分は空が顔を出している。その色が赤いことから現在が夕暮れ時だということが分かった。

この海沿いの道は、夕日の沈む光景が見れる絶景の場所だ。海の音と相成って、静かに沈んでいくその光景が石川は好きだ。だから今が曇り空であることが少し残念に思う。

せつかく朝倉も居るのに。

……居るのに？

それがなんだっていつのだろう。

自分は何を考えているのか。

「どうしたんですか剣君。そんな今から銀行に押し入ろうとする銀行強盗さんを目撃して我関せずを決め込むか警察へ一報入れるか迷ってるような顔をしてー」

「どんな例えだ！」

笹井は、あはーと気の抜けた笑顔を展開している。

「妙に具体的な例えでしたが、経験談ですか」

笹井は、あはーと引き攣った笑顔を展開している。

「……………」

「奇人は奇怪な現象に巻き込まれるということだ、と解釈した石川は深く突っ込むことを止めた」

「声に！ 声に出てますよ出ちゃいけない声がー！！」

「ああしまった！ 素直な性格が災いしてしまいましたね」

ふつむ、と顎に手をやる石川。

「先生この子が分からないですよー！！」

笹井の涙声が木霊する。

「ははは、得てして人というものは分からないものです。それを分かるうと努力することがコミュニケーションであり、理解したと誤解することで人間関係が成り立つのです」

「終盤随分皮肉ってますねえ」

「しかしそうでしょうか？ 他人や自分を型にはめて考えるからこそ人は安定できる。あの人はこういう人だ、こういう過去を持っているからこう感じているに違いない。なら自分はこういう態度をとらねばならない。……憶測が誤解を呼び誤解を正解と思ひ込み、その思い込みがさらにお互いの意思に齟齬を生む。しかし齟齬が生まれてもいいんです。何故ならそれは人に見えるものではないし、それを気にしているような人もまた少数なのだから。 それでも人は、なんとかやっつけていけてるんです」

だから先生、と石川は続ける。

「大切なのは理解しようと勤めることです。その過程だけでも相手に伝われば、それは十分にコミュニケーションがとれているということになる」

人差し指を立て、

「それが例え、思わず思考を心理描写風に漏らしてしまうようなことでもです」

「せ、先生なんだか言い包められてますよー！」

「失礼な、積極的な思考のもと言葉巧みに説得しているんですよ」

「それ言い包めてるってことじゃないですかー！」

ああそうだ、と石川は言う。

「肯定されました!？」

「いや、そうじゃなくてですね。先生は、幽霊というものが何故怖いと思いますか？」

「話しが随分飛んだ気がするんですが……」

それでも律儀に考える笹井。元々付き合いが良いほうなのだろう。幸い、今歩いている唐琴から渋川へと繋がる沿岸は、歩けば十分はかかるだろうという道のりだ。話をする時間も思考をする時間も十分にある。

「きちんと繋がっていますよ」

一応一言反駁する石川は、笹井の言葉を待つべく口を閉ざした。

「うーん、先生は幽霊さんが見えないから怖いんだと思います」

「見えないから？」

笹井は頷き、

「はい。だって見えないと何も出来ないじゃないですか。だったら幽霊さんが何をしてきても防戦一方なわけで、いえいえ、防戦だつてできないじゃないですか！。もう呪われて依り憑かれて殺されてしまいます」

「では見えれば怖くはないんですか？」

見えれば怖くないのかと問われ、笹井は想像する。

自分の勤める夜の学校で宿直をしていたときに出たらどうだろう。自分一人しか居ない夜の廊下をこつこつと足音を響かせながら歩く。そしたら、誰も居るはずのない自分の後方から足音が響いてくるのだ。

こつ、こつ、こつ……。

姿が見えない。かといって振り向きたくもない。

できれば出てきて欲しくはないだろう。

もし振り返ったその先に、足のない半透明なおじさんがグロテスクな顔面を歪ませながら恨めしそうに自分を睨んでいたら

「こ、怖いですよー！！」

心の底から叫んだ。

「そりゃ怖いでしょうね」

うんうん、と頷いている石川は、

「では何が怖いのでしょうか？」

と続けた。

……何故怖いのか？

そんなことを考えたこともなかった笹井はもう一度考える。こつこつというときは原点に戻るのが大切だ。笹井が幽霊というものを初めて

知ったのは、まだ肌が水を弾くほどに弾力のある餅肌だった天使のように愛らしい少女時代。つまり保育園児くらいのことだったと思う。

……言いすぎですか。でも先生今でも水は弾きます。

一人心中で突っ込む笹井は、更に考える。初めて肝試しというものをしたのがその年齢だったので、少なくともその年齢で幽霊という存在は知っていたはずだ。そして、笹井は見事その肝試しで泣いている。今考えれば幼稚園の先生が教室内にいる細工を施したような、幼稚なものだったのだが、それでも当時の自分は怖かった。今でも怖いかもれない。

だからその何が怖かったのか。

笹井の思考はそこで止まる。

怖いものは怖いのであってそこに理由はなくただ怖いのだなんていうトートロジーは逃げでしかないのだろうが、明確な理由なんていうものは笹井には思いつかない。だから想像してみる。

幽霊という存在を知らなかったと仮定した自分だ。

そんな自分が初めて肝試しをしたとして、それは怖いのだろうか。なんせ肝試しは幽霊が出てきてこそその肝試しだ。そのフアクターとなつている幽霊を理解していなかったとして、幼い頃の自分はやはり泣くのだろうか。

笹井は思う。

泣くだらうつと。

なんせ肝試し前に、保育の先生たちは皆一様に怖いぞ怖いぞ言っていたし、周囲の園児たちもどこか不安気で、集団心理となつて怖いという状態が作られていたのだから。その中、静寂で満ちた薄暗い教室へ一人入らされたら泣くに決まっているではないか。そして思うのだらうつ。

そうか、この怖いのが幽霊なのかと。

……ちょっと分かってきた気がしました。

だから笹井は隣を歩いている、妙に理屈を捏ねる生徒に言うこと

にした。

「そうですね。私もそう思います」

石川は言う。

「幼い頃から既に型が出来上がっているんですよ。幽霊は怖いものだ、幽霊は人を呪うものだ、幽霊は依り憑くものだ、ってね。まだその存在を理解していない頃から周囲がそれだけ騒げば、当然無意識に怖いと思ひ込みますよ。それが形として意識されているのも、長い間それについて語り継がれてきた結果です。外国のゴーストと日本の幽霊の映画などを見比べればそこらへんの型っていうのが顕著に現れているのがすぐに分かりますよ」

一息つき、

「日本の幽霊は視覚・聴覚に訴えた恐怖に、情緒が加わります。幽霊の過去があり、気持ち分かるからこそ怖いものがある。中途半端に理解出来てしまう分、恐怖が増すんですよ。それに比べてアメリカなどになるとスプラッタ面が強くなりますし、ゴーストも騒がしいコメディから、シリアスなものは悪魔など超常現象的なものになってきます。そこら辺が、築いてきた型が違う、言いかえれば文化の違いってやつですね。まあ、最近じゃ相互理解もあり内容があつちにいったりこつちに來たりとしますが……」

ですが、と笹井が呟いた。

「幽霊さんを怖がっていない人も居ますよ？ 警備員のゲンさんだつてこの前先生が宿直で、夜の見回り怖いからって言ったたらゲンさん代わってくれましたし！ それとも年喰いすぎて鈍感になっているのでしょうか！」

「……失礼極まりない不良教師！」

「えー、ですが会話のキャッチボールしてても返球までに十秒以上のタイムラグがー。ゲンさん可愛いので許してしまいますが」

溜息を漏らし、

「幽霊を怖がつて居ない人も確かに居ますが、それでも幽霊というものがどういふものかは皆漠然と理解している。いや、理解していると誤解している」

「それにしても意外ですねー」

「何がですか？」

「剣君が幽霊を信じてるってことですよ。屁理屈こねる現実主義者かと思っただけです」

腕を組みしきりに笹井は頷いている。

「誰が信じているなんて言いました？」

石川が言い、笹井が間抜けな顔で頷いていた顔を上げる。

「私が幽霊に対してどんな解釈をしようと、それが信じているということには繋がりませんよ。例え信じていないものでも、ただ居ないと思うから居ないんだという訳にはいかないでしょう。居ないというのならその根拠を得るためにある程度調べなければならぬですし、調べていれば自分なりの解釈も出てくる」

いいですか、と石川は言い頭を人差し指で叩く。

「私の知識は守るために非ず、攻めるためにあるのです」

「……面倒くさい人ですねー」

笹井は率直な感想を言い、

「でしたら、剣君は幽霊というものの存在は信じていないのですねー。幽霊が何故怖いかというのも」

「幽霊は怖いものだ、と人が考え出した幻想です。日常にそんなものは存在しない」

自分で自分を怖がらせてれば世話ないですよ、と続けた石川は肩をすくめた。

そのまま右隣を視線だけで見る。

朝倉だ。

相変わらずむっつりとした表情で地面を見ながら歩いている。普段人と会話をするということを目を倒くさがる自分が、笹井とこんな

面倒くさい内容の会話をしているのも言ってみれば朝倉がこんな状態だからだ。会話を止めれば不自然な沈黙が訪れるだろうし、そうなればそんな状態に自分は耐えられそうにない。

……笹井先生は朝倉さんの様子に気付いていないようだし。

面倒なことだ、と石川は思う。

人付き合いは好きではないし、得意ともいえない。話せといわれれば今していたように会話も出来ないこともないが、どうしても今の朝倉をみるような人の内面を見るのは面倒に思えて仕方がない。気を使わなければならぬし、訳のわからない感情をぶつけられることもある。

……だから部活にも入りたくないんだ。

人間関係を作ってしまうえば嫌でも踏み込んでいかなければならぬし、また踏み込まれもする。いくら自分が一線を置いた関係を望んだところで、部活動なんていう他人と行動を共にする機会の多い場所に入ってしまったえばその一線すらままたまならないだろう。

「笹井先生の臆病という言い方も、的を射ているな」

ふん、と鼻を鳴らしながら小声で呟いた。

第一話 【蒼い夕暮れ その1】（後書き）

どうも、はじめましての方は初めまして。

イシカワ ツルギ
石川 剣です。

この度は私の拙い文章をご愛読いただき有り難うございます。まだ始まったばかりで此処から話がどう進んでいくのか、皆目検討も付かないと思いますが、今後ともご愛読いただければなと思う次第です。

しかし当方、超が付くほどの遅筆ですので……。

正直な話次回投稿がいつになるのかは分かりません。

誠に申し訳ありませんが、首をながくして……、というのは皆様「待っててくださいね」ということを前提とした言い回しですので、ええと、そうですね。

偶然見かけたら読んで頂けると幸いです。

では、次回お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、夕テ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4055e/>

夕暮れは蒼く染まる ~ 双刀の物語 ~

2011年1月8日21時44分発行